

# ケンチク学ビバ 第8回

北海道大学 大学院工学研究院  
建築都市空間デザイン部門  
建築計画学研究室 森 傑  
建築の実際(Reality)と  
責任(Responsibility)を直視する



2013年6月13日に開所した「居場所ハウス」。下/外観。気仙大工の伝統技術を活かし、陸前高田市の民家の木造フレームを移築・再利用した。上/居場所ハウスの様子(2014年10月19日 写真提供:居場所ハウス)。



上士幌町ふるさと納税感謝祭2015でのセントラルベルト構想展示ブースへは、石破地方創生担当大臣や高橋北海道知事が訪れた。右の赤いのはびびが筆者。



上士幌町セントラルベルト構想。役場北側の町道新設と民間病院の移転が完了し、認定こども園も竣工。生涯学習センター複合施設化の基本設計に入る。今後、街中挿入型の公営住宅、交通ターミナル、セントラルパークの整備計画を進める予定だ。



上/小泉地区集団移転の計画図(2014年7月31日作成)  
下/小泉地区の造成工事の様子(2014年11月16日撮影)

北海道大学 大学院工学研究院  
建築計画学研究室  
森 傑 MORI, Suguru

1973年兵庫県尼崎市生まれ。1996年大阪大学工学部建築工学科卒業。2001年同大学院工学研究科博士後期課程を修了し、北海道大学助手に着任。助教授、准教授を経て、2010年から現職。2003年から1年間、米国ウィスコンシン大学ミルウォーキー校で客員研究員。2013年度人間・環境学会賞。  
suguru-m@eng.hokudai.ac.jp

## 学生の声

一番の収穫は人との関わりです。研究では東日本大震災で被災した20人以上の方から避難経緯や苦悩について何時間も話を聞きました。調査を快諾してくれた方、涙ながらに語る方、その方々のために自分でもできることをしたい、そう思い修士論文を書きました。

設計やまちづくりの活動では、自分たちの提案が実際の施主や住民に影響を与えます。そのため、当事者との議論は力が入るし、提案に妥協ができません。深く深く思考を練ることのできた機会でした。そして、コンペなどで3年間共にしたのが6人の同期です。時には意見が衝突し、時には10時間以上も籠り議論しました。しかし、直面した課題を皆で試行錯誤して乗り切っていく中に、楽しさを見つけられました。人からたくさん学びを得た研究室生活でした。(大学院修生 島口拓也)

私は人がどのように空間の中で活動するのか、居るのか、ということに関心があり、また自分の知らない世界を知りたくて、乳幼児やその育児者の活動を追いました。思いがけない空間の使い方や発見があり、標準や平均、一般的な設計というものの限界と、逆に設計に新たな視点や気づきを見ました。

研究室のプロジェクトとしては、オフィスの使われ方調査や、町の住民の活動の流れを把握し、それを設計に反映するなど人々にマッチする個別解を丁寧に探っていくことの大切さを学びました。人口減少に伴って、一人一人の個性が浮き彫りになってくる未来にとって、この視点はとても必要なものであり、研究室で学べたよい体験でした。(大学院修生 山田美結)

人々の生活、あるいはその集積である社会と建築との関わりについて研究したいと思っています。学部4年では、今日一般的な住まいとして定着しつつあるシェアアパートメントの調査を行い、たくさんの住人の方の人生を伺いました。リーマンショックが転機になった住人、東日本大震災で人生が大きく変えられた住人、両親が不仲だったことがその後の人生に長く尾を引いていた住人……。それらの千差万別の人生を送る住人たちが、シェアアパートメントという一つの建築の中で共に生活をしていました。その様子を目の当たりにしたとき、建築とは、人々のいま・そこで生活のためにこそあるべきだと痛感しました。そして、それらの生活の集積が社会をつくるのであり、人々の生活や社会に接近した建築のあり方を追求していきたいと思うようになりました。(大学院修士2年 坪内健)

## 建築計画(学)の浸透と批判

建築を学ぶ方や建築関連職の方で、建築計画(学)を耳にしたことがない人はいないでしょう。この建築学科にも「建築計画」の科目はありますし、建築士試験でも「建築計画」は外せません。建設予定地の「建築計画のお知らせ」の野立て看板のように、日常生活でも建築計画(学)は広く浸透しています。一方、建築計画(学)を批判する声もあります。施設種ごとで縦割りの計画であるとか、標準設計に縛られた理論であるといった指摘です。個別多様化が進む現代では、まるで建築計画(学)は足枷だといわなければなりません。

## 建築計画学研究室を名乗る

実は最近の大学で建築計画学をそのまま名称とする研究室はあまり多くありません。日本に建築学科が生まれた当初は、計画系の研究室は皆、建築計画学第一研究室、第二研究室のように名乗っていました。先の批判やそれへの反省が一因でしょうか。今や絶滅危惧種のように。それでも、私は「建築計画学研究室」を名乗り続けたいです。建築計画(学)ほどその成果と蓄積が私たちの生活に根付いた学問はありません。学術的にも社会的にも、その役割と責任がこ

## 建築を計画するための学問

東日本大震災の復興や新国立競技場の建設の論争などを見れば、むしろ今日ほど建築の計画のあり方が問われている時代はないといえるでしょう。もちろん従来通りでは通用しません。私は、建築計画学を「建築を計画するための学問」と説明しています。それは、建築を実際に計画する上で必要となる学術的な知という意味であり、人々が建築を計画するときまさに日常において直面している問題に焦点を当てています。やや小難しい表現ですが、科学哲学的には「研究の問題関心(研究のための研究)」ではなく、「実務的問題関心(リアリティに迫る研究)」に基づいた建築計画学を目指しています。

## アクションリサーチ

研究室活動は必然的にフィールド重視です。ですが、それは調査対象としてという意味ではありません。今まさに解かなければならない諸問題に直面した現場という意味です。現場の問題を解決しながらアカデミックな課題を発掘する。アカデミックな成果を応用しながら現場の問題を解く。東日本大震災からの復興を支援する岩手県大船渡市「居場所ハウス」の設

計は、建築計画学の環境移行理論に基づいています。設計する際は理論や成果と結びつけスタディを重ねます。そして、つくりっぱなしではなく、竣工後もコンセプトや手法へ埋め込んだ仮説の検証を重視します。例えば定期的に利用実態調査を実施し、コミュニティカフェがどのように被災地域の心理的・社会的回復へ貢献できるのかを学術的にレビューしています。

## On-the-job Training (OJT)

教育も必然的にOJTが基本となります。実際の計画や設計に学生が関わる際も、基本的な指示のみを出して丸投げし、学生自らが判断して動かなければならぬ状況や課題を課すこともあります。学生へは「これは仕事だ」と伝え、実務現場の一員としての責任を自覚させています。また、研究室が実践や実務を行うことの意味も常々話っています。民間の設計事務所と同じことをするのであれば、既に優秀な組織が周りにたくさんありますから出しゃばる必要はありません。いま・なぜ・そこへ我々が何を必要なのか。研究室が社会へ直接関わるべき使命や役割を認識しなければなりません。

## 脱スケール・脱ビルディングタイプ

研究室が取り組む現場は、深刻

な人口減少や生活環境の問題を抱えていることが多いです。人口約5000人の北海道上士幌町では、公営住宅の更新、公共施設の再編・複合化、公共交通の再構築、土地利用の合理化などの横断的・総合的な計画に携わっています。私たちが抱える諸問題は極めて複雑で、それが深刻になればなるほど要素分解的に解くことはできません。建物の種類や大きさで細分化された従来の建築計画(学)では限界があります。宮城県気仙沼市小泉地区の集団移転計画のように、建築計画から都市計画をして土木計画への越境も、躊躇なく挑戦しているところではあります。

## 専門的なジェネラリスト

今日の現場で必要とされるのは、特定分野のスペシャリストではありません。次世代の新しい社会環境を提案・実現できる専門的なジェネラリストです。建築計画(学)とは本来、建築に関わる知識と技術の総合化・統合化です。時代はまさに建築計画(学)を求めており、研究室もそれへ応え得るよう邁進しています。学術と実践を行き来する現場を通じて、アカデミックなセンスを身につけた実務者、プラクティカルなセンスをもった研究者を輩出していきたいと考えています。(森 傑)